

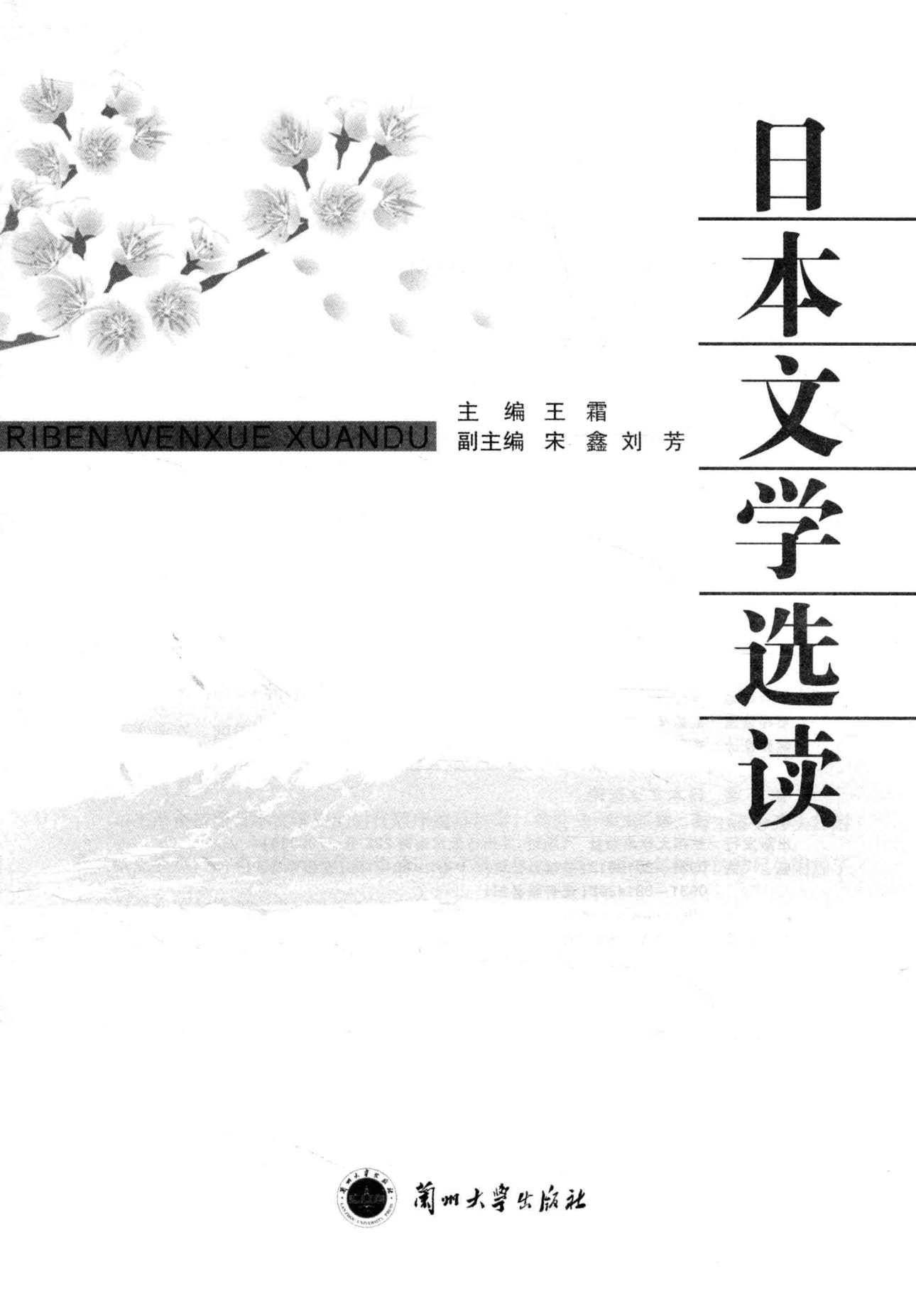


RIBEN WENXUE XUANDU 王 霜 主编

日 本 文 学 选 读



兰州大学出版社



日 本 文 学 选 读

RIBEN WENXUE XUANDU

主 编 王 霜
副主编 宋 鑫 刘 芳



兰州大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学选读 / 王霜主编. —兰州:兰州大学出版社,2014.3

ISBN 978-7-311-04424-4

I. ①日… II. ①王… III. ①日语—阅读教学—高等学校—教材 ②日本文学—文学欣赏 IV. ①H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 057833 号

策划编辑 梁建萍
责任编辑 梁建萍 张 莉
封面设计 李鹏远

书 名 日本文学选读
作 者 王 霜 主编
出版发行 兰州大学出版社 (地址:兰州市天水南路 222 号 730000)
电 话 0931-8912613(总编办公室) 0931-8617156(营销中心)
0931-8914298(读者服务部)
网 址 <http://www.onbook.com.cn>
电子信箱 press@lzu.edu.cn
印 刷 兰州万易印务有限责任公司
开 本 787 mm × 1092 mm 1/16
印 张 21
字 数 450 千
版 次 2014 年 4 月第 1 版
印 次 2014 年 4 月第 1 次印刷
书 号 ISBN 978-7-311-04424-4
定 价 38.00 元

(图书若有破损、缺页、掉页可随时与本社联系)

前言

本书收集了日本近现代知名作家的优秀作品，是编者在教学讲义的基础上反复推敲筛选而成的，除了个别作品属于节选之外，基本上都是完整的篇章。

本书基本上涵盖了自日本明治时期到昭和时期以来日本文学界各个流派和思潮的代表作家的代表作品共 25 篇，在内容上充分注意点与面的结合，兼顾各个时期主要流派的作家及其作品。使读者可以深刻领会各个不同历史时期产生的不同文学派别的社会背景、写作特点和所代表的文学思想。通过本书，可以使我们了解、鉴赏日本文学和体味日本文化，学习不同作家的语言风格和表达艺术。本书作为日本文学选读课的教材，主要面向大学本科日语专业三、四年级的学生。

本书有以下特点：

本书严格按照日本文学史的时代顺序编排篇章，共分为六个部分，每个部分开头都附有文学史要点，对当时的代表作家作品进行了概括性的介绍，并在每部分的结尾处附加了部分有名作家的逸闻趣事以及针对文学简史的练习题。

每篇作品都给出了作者的生平、写作风格、特点以及创作理念等，有助于读者更好地了解作品的时代背景以及中心思想。

在每篇作品后都加入了单词解释和作品的阅读要点，对学习者更准确地赏析原作起到了点拨作用。

本书所选的文学作品中有不少已被拍成了影视作品，建议在学习结束后可适当观看相关的影像资料，达到加深印象以及增加趣味性的目的，从而提高教学的质量和效果。

全书由王霜总体设计，包括安排各章节内容，撰写各个时代的文学史要点，统稿。宋鑫负责选择并编排文学作品，撰写作家生平及其写作风格、创作理念等内容。刘芳负责编写篇章后的单词解释、作品解读要点、练习题以及作家的逸闻趣事等内容。

本教材为兰州理工大学立项教材，在编写过程中得到了兰州理工大学日语系教师的大力协助，在此表示衷心的感谢。同时本教材的出版也得到了兰州理工大学教务处的大力资助，特此鸣谢！

由于编者水平有限，书中难免有不足之处，敬请专家、读者批评指正。

王 霜

2013年11月

目 录

一、近代文学の出発（明治維新から十九年まで）

近現代文学史ポイント（一） / 1

ア、啓蒙文学 / 1

イ、写実主義文学 / 2

ウ、擬古典主義文学 / 3

エ、前期浪漫主義文学 / 4

作者紹介及び作品選（一） / 6

二葉亭四迷 / 6

浮雲（第二編） / 7

樋口一葉 / 20

十三夜 / 20

近代文学史練習問題（一） / 33

近代文学散歩（一） / 34

二、近代文学の成立期（明治三十年代から四十年代まで）

近現代文学史ポイント（二） / 36

ア、自然主義 / 36

イ、後期ロマン主義 / 38

ウ、余裕派、高踏派 / 39

作者紹介及び作品選（二） / 42

森鷗外 / 42

高瀬舟 / 42

阿部一族 / 51

夏目漱石 / 79

坊っちゃん（一部） / 80

吾輩は猫である（一部） / 88

田山花袋 / 100

少女病 / 101

近代文学史練習問題（二） / 114

近代文学散歩（二） / 115

三、近代文学の成熟期（大正年間）

近現代文学史ポイント（三） / 118

ア、耽美派 / 118

イ、白樺派 / 120

ウ、新思潮派 / 123

エ、奇蹟派 / 126

作者紹介及び作品選（三） / 127

志賀直哉 / 127

城の崎にて / 127

清兵衛と瓢箪 / 133

芥川龍之介 / 139

羅生門 / 139

藪の中 / 146

河童（一部） / 156

近代文学史練習問題（三） / 169

近代文学散歩（三） / 170

四、昭和文学の展開期（大正末期から昭和十年代まで）

近現代文学史ポイント（四） / 172

ア、プロレタリア文学 / 172

イ、新感覚派 / 173

ウ、新興芸術派 / 176

エ、転向文学 / 177

作者紹介及び作品選（四） / 178

葉山嘉樹 / 178

セメント樽の中の手紙 / 179

小林多喜二 / 182

人を殺す犬 / 183

川端康成 / 187

伊豆の踊子 / 187

横光利一 / 209

頭ならびに腹 / 209

蠅 / 214

井伏鱒二 / 220

山椒魚 / 221

堀辰雄 / 227

風立ちぬ（冬） / 229

近代文学史練習問題（四） / 243

近代文学散歩（四） / 244

五、戦後文学の発展（昭和二十年代から三十年代まで）

近現代文学史ポイント（五） / 246

- ア、民主主義文学 / 246
 イ、無頼派 / 247
 ウ、戦後派 / 249
 エ、第三の新人 / 251
 作者紹介及び作品選（五） / 253
 太宰治 / 253
 走れメロス / 254
 坂口安吾 / 264
 桜の森の満開の下 / 265
 宮沢賢治 / 284
 猫の事務所 / 285
 注文の多い料理店 / 293
 近代文学史練習問題（五） / 301
 近代文学散歩（五） / 302

六、近代の詩歌、短歌、俳句（明治元年から昭和三十年代まで）

- 近現代文学史ポイント（六） / 304
 ア、詩歌 / 304
 イ、短歌 / 306
 ウ、俳句 / 307
 作者紹介及び作品選（六） / 308
 萩原朔太郎 / 308
 月に吠える（一部） / 309
 北原白秋 / 317
 邪宗門（一部） / 318
 近代文学史練習問題（六） / 323
 近代文学散歩（六） / 324

近代文学の出発（明治維新から十九年まで）

近現代文学史ポイント(一)

ア、啓蒙文学

1. 背景

- (1) 幕府崩壊、文明開化、明治政府の改革。
- (2) 啓蒙思想家の活躍（西周、中村正直、福沢諭吉）。
- (3) 前代思想の残存。

特徴

- (1) 実用主義で、文芸は軽んじられた。
- (2) 文学を政治啓蒙の手段とした。

2. 戯作文学

仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』と『安愚楽鍋』。

江戸時代以来の古いジャンルである戯作の文体で、文明開化の風俗や啓蒙思想家らに対して、滑稽に描いたもの。新時代の本質を捉えることが出来ず、新しい文学の先駆とはならなかった。

3. 翻訳小説

織田純一郎の『花柳春話』と川島忠之助の『80日間世界一周』。

翻訳文学流行した理由。

西欧に対する好奇心、外国文化、習慣、風俗に対する理解、伝統的文化の近代化。

4. 政治小説

政治上の啓蒙、主張、宣伝、風刺などをその目的とする小説。矢野竜溪の『経国美談』

と東海散士の『佳人之奇遇』末広鉄腸の『雪中梅』。

5. 福沢諭吉（ふくざわ ゆきち）

明治の代表的な啓蒙思想家。『西洋事情』や『文明論之概略』『学問の勸め』などの著作を発表し、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」といって人間の自由と平等などの近代思想の原理を紹介した。明治維新後の日本が中華思想、儒教精神から脱却して西洋文明をより積極的に受け入れる流れを作った（脱亜入欧思想）。

6. 明六社

1872年森有礼の発起により福沢をメンバーとして結成された最初の日本の学術団体。機関紙は『明六雑誌』。

イ、写実主義文学

現実をあるがままに再現しようとする芸術上の立場。リアリズム。写実主義文学論の提唱。

1. 坪内逍遙

本名は坪内雄蔵、明治時代に活躍した日本の小説家、評論家、翻訳家、劇作家。『小説神髓』『当世書生気質』を発表して写実による近代文学の方向を示した。西欧文学の理解のもとに旧時代の勸善懲惡主義を批判し、写実主義による新小説を提唱実践して近代文学を基礎づけた先覚者。

(1) 代表作品

① 『小説神髓』

近代日本最初の文学理論書で、近代文学の方向を最初に明らかにした。文学の自律性を主張した。文学の中心ジャンルに小説をすえた。写実主義を主張した。

② 『小説神髓』の実践作『当世書生気質』

当時新興の書生を対象としてその生活の種々相を細かに写し出したところに新味があったが、人物が類型的で、深い人間探求や社会批判がなく、用語にも戯作調が目立って、「新旧両時代の橋梁」と位置づけるべき作品だったとしか言えない。

(2) 逍遙の影響

坪内逍遙の文学理論と実作に内在する近代性と前近代性（戯作性）の二重性のため、その影響下の後の文壇には、尾崎紅葉をかしらとする硯友社の文学と、二葉亭四迷に代表される近代文学という、二つの傾向を生み出す結果となった。

2. 二葉亭四迷

二葉亭四迷（1864—1929）は、日本近代文学の創始者であり、批判的リアリズム文学の先駆者でもある。1886（明19）年『小説総論』を発表して逍遙の『小説神髓』よりはるかに徹底したリアリズムの実質を示し、翌年、『浮雲』を発表して近代リアリズム文学の創始者となった。

代表作品

①『小説総論』

坪内逍遙の写実は「只傍観してありのままに模写する」という現象の再現にとどまりがちであった。二葉亭の模写は現象を本質との関係においてとらえ、写実における個々の意味深い現象を選択・構成・描写して、深い本質の表現をめざすものであった。本格的な近代リアリズムの文学理論を提出した画期的な意義をもつ評論であって、『浮雲』の方法論的母胎となった。

②『浮雲』の新しさ

言文一致体描写の手法、客観的リアリズム随筆ム人物の造型、心理面新旧思想の対立。

ウ、擬古典主義文学

明治22年代、行きすぎた欧化主義への反動から江戸文学、とくに西鶴にならった擬古的な写実観に立つ文芸思潮。尾崎紅葉を中心とした硯友社の作家や幸田露伴らの文学をさす。雅俗折衷体と物語の面白さで受け入れられた。

1. 尾崎紅葉

近代最初の小説家の結社硯友社を興して首領となり、明治22年代の最有力作家である。種々の方法を試みて時代風俗と人間を描き、文学における芸術性と大衆性をともに生かすべく努力した。

代表作品

①『二人比丘尼色懺悔』

1889年雅俗折衷体の出世作として発表した。

②『多情多恨』

1896年（「である」調）を発表。

③『金色夜叉』

1897年から6年間にわたって連載し、未完のまま終わった。制作中からすでに上演された人気作であり、紅葉文学の集大成とも言える作品である。金銭と愛情との相克を描

き、人生においては金よりも愛のほうが永続的で大事なものだということを訴えている。

2. 幸田露伴

紅葉と同じく西鶴に学びながらまったく対照的な作品世界をつくりあげて、明治 22 年に紅露時代を築いた。小説のほかには史伝、評論、考証などに大きな業績を残している。

(1) 文学的活動

『露団々』を処女作とし、『風流仏』によって一躍文壇に声名を馳せた。『五重塔』などの代表作を発表した。

(2) 紅露の作風比較

作家	文章	題材	作風	系譜
紅葉	言文一致体	情緒的な女性	写実的	西鶴に傾倒
露伴	文語文体	気迫ある男性	理想主義的	同上

3. 樋口一葉

明治 5 年 2 月 25 日—明治 29 年 11 月 22 日 (1872—1896) 東京生まれ。歌人、小説家。25 年 (1892) に発表した『うもれ木』は出世作となり、『文学界』同人との交流を得た。『にごりえ』、『たけくらべ』など明治時代の貧困と身分差別の中で生きる庶民の涙とため息、そこへの深い共感。

4. 硯友社

明治期の文学結社。日本において最初の文学社、1885 年、尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案、によって発足。『我楽多文庫』(日本初の純文芸雑誌) を発刊、当時の文壇で大きな影響を与える一派となった。明治 26 年 (1922 年) 12 月の紅葉の死によって解体したが、近代文体の確立など、その意義は大きい。

(1) 文学の価値を広く社会一般に知らせ、出版界をも発展させた。

(2) 当代の文学を改良し、各方面に新分野を切り開き、こうした努力は写実主義を進展させ、次の時代を拓く自然主義文学の台頭に一つの契機を与えた。

(3) 擬古典主義であり、真の近代文学とは言えないが、近世文学から近代文学に移る過渡的、架橋的な役割を果たした。

工、前期浪漫主義文学

18 世紀末から 19 世紀の初めにかけてのヨーロッパで、芸術、哲学、政治などの諸領域に展開された精神的傾向。近代個人主義を根本におき、秩序と論理に反逆する自我尊

重、感性の解放の欲求を主情的に表現する。

1. 森鷗外

本名は森林太郎。明治、大正期の小説家、評論家、翻訳家、陸軍軍医総監（中将相当）医学博士、文学博士。第一次世界大戦以降、夏目漱石と並ぶ文豪と称されている。

森鷗外のドイツ留学土産の三作品

『舞姫』、『うたたかの記』、『文づかい』。

『舞姫』は、森鷗外の短編小説。1892年（明治22年）、『国民之友』に発表。森鷗外が1884年から4年間ドイツへ医学を学ぶために留学した時の体験を下敷きにして執筆された。主人公の手記の形をとり、その体験を綴る。高雅な文体と浪漫的な内容で初期の代表作。人間性の解放と主情的真実を探り、自我の確立を旨とした。

2. 北村透谷

日本の評論家、詩人。はじめ政治家を志したが、失敗してから、文学に転じる。明治期に近代的な文芸評論をおこない、島崎藤村らに大きな影響を与えた。1894年（26歳）に自殺した。

代表作品

①『楚囚之詩』

1891年自費出版したが、出版直後に後悔し自ら回収した。

②『厭世詩家と女性』

1892年『女学雑誌』に評論代表作『厭世詩家と女性』を発表する。日本において初めての大胆な自由恋愛の宣言。

③『内部生命論』

自我の尊厳と人間性の探求を主張する文芸論。

3. 樋口一葉

美しい彗星の如く現れて消えてしまった「今清紫」ともいわれた天才女流作家である。15歳のとき「萩の舎」の塾に入門し、和歌を中島歌子に学び、その後小説を半井桃水に学んだ。明治27、28年から『文学界』に寄稿して、文壇に注目されたが、若年にして世を去った。西鶴調の雅俗折衷の文体を用い、社会底辺で貧困と封建道德の風習に縛られて生きる女性の哀れさ、抒情豊かにリアルに描いた。

4. 泉鏡花

明治・大正・昭和の三代にわたって三百余編の作品を発表。感覚的文体と矯激な美意識に支えられた浪漫的・神秘的文学に独自の境地を開いた。

代表作品

- ① 小説『照葉狂言』『高野聖』『歌行燈』。
- ② 観念小説『夜行巡查』『外科室』。
- ③ 戯曲『日本橋』。

5. 観念小説と悲惨小説

観念小説とは、当時作家が社会の不合理に対する抗議を一つの観念として、作品に具象化したものである。代表作泉鏡花の『夜行巡查』『外科室』、川上眉山の『書記官』。

悲惨小説（深刻小説）とは、戦後社会における社会の矛盾に着目し、庶民生活の悲惨な様相に取材し、社会組織の罪悪や欠陥を究明しようとした小説。代表作広津柳浪の『今戸心中』 観念小説や悲惨小説は、作者の社会認識も自覚も幼稚で、内面の深化に至らなかった。



作者紹介及び作品選(一)

二葉亭四迷

二葉亭四迷（1864—1929）は、日本の小説家、翻訳家。本名、長谷川 辰之助。筆名の由来は、文学に理解のなかった父に、「くたばってしめ（ま）え」といわれたことから（ただし俗説であるとの見方も強く、確証はない。一説には自嘲ともいわれる）。長谷川二葉亭とも呼ばれる。江戸市ヶ谷生れ。彼の自筆履歴書によると、1882年2月1日から1885年11月25日まで、当時の専修学校で学び、卒業した。また、東京外国語学校（現東京外国語大学）露語科入学後、同科が改組されてできた東京商業学校（現一橋大学）第三部露語科を1886年1月に中退。坪内逍遙と交流を結び、その勧めで評論『小説総論』を発表。1887年～1819年の間に出された写実主義小説『浮雲』は言文一致体で書かれ、日本の近代小説の鼻祖となった。また、ロシア文学の翻訳も多くてがけ、ツルゲーネフの『あひびき』『めぐりあひ』は特に有名。自然主義作家へ大きな影響を与えた。後に『其面影』『平凡』を書いたが、1929年、ロシア赴任からの帰国途中、ベンガル湾上で客死した。

小説『浮雲』のあらすじ

内海文三は融通の利かない男である。とくに何かをしくじったわけでもないが役所を免職になってしまい、プライドの高さゆえに上司に頼み込んで復職願いを出すことができずに苦悶する。だが一方で要領のいい本田昇は出世し、一時は文三に気があった従妹のお勢の心は本田の方を向いていくようである。お勢の母親のお政からも愛想を尽かされる中、お勢の心変わりが信じられない文三は、本田やお勢について自分勝手に様々な思いを巡らしながらも、結局何もできないままである。

浮雲(第二編)

だんござか きくみ

第七回 団子坂の観菊 上

二葉亭四迷

日曜日は近頃に無い天下晴れ、風も穏かちり たで塵も起くつたず、暦を繰くつて見れば、旧暦できくづきはじめ菊月初旬という十一月二日の事ゆえ、物観遊山には持もつて来いと云う日和ひより。

園田一家の者いっけは朝から観菊行の支度きくみゆきとりどり。晴衣したくの亘長はれぎを気ゆきにしてのお勢のじれこみかんしゃくがお政の肝癪かんしゃくと成て、廻りの髪結かみむすの来ようの遅いいぐちのがお鍋たなの落度すりばちとなり、究竟ひとりは万古かの茶瓶かが生れも付かぬ欠口かになるやら、架棚なうての挿鉢ながつちりが独手ただいまに駈出すやら、ヤッサモッサこねかえ捏返あやにくしている所へ生憎なうてな来客ながつちり、しかも名打ただいまの長尻ちからこぶで、アノ只き今から団子坂へ参ろうと存じて、という言葉みこしにまで力瘤すを入れて見ても、まや薬きほども利かず、平気よで済まして便々とお神輿よを据よえていられる。そのじれよったさ、もどかしさ。それでも宜よくしたもので、案じるより産むよが易く、客もその内よに帰れば髪結よも来る、ソコデ、ソレ支度よも調い、十一時頃には家内よも漸よく静よまって、折節よには高笑よがするようになった。

文三は拓落失路たらくしつろの人、仲々もつ以て観菊などという空そらは無い。それに昇そらは花そらで言えば今そらをはるべそら春辺そらと咲誇そらる桜そらの身そら、此方そらは日蔭そらの枯尾花そら、到頭そら楯突そらく事そらが出来ぬ位そらなら打たせられそらに行くでも無いと、境界きょうがいに随つれて僻ひがみを起おとつし、一昨日さそわれ昇ことわに誘引ことわた時既ことわにキッパリことわ辞ことわッことわて行かぬと決心ことわしたからは、人が騒ことわごうが騒ことわぐまいが隣家ことわの疝ことわ気で関ことわ繋ことわのない嘸ことわ、ズット澄ことわしてことわいられことわそうことわなものことわのさことわて居ことわられぬ。嬉ことわしことわそうことわに人ことわのそことわわことわつくことわを見ることわに付けことわ聞くことわに付けことわ、またことわしても昨日ことわの我ことわが憶ことわ出ことわされて、五月ことわ雨頃ことわの空ことわと湿ことわめる、嘆息ことわもする、

面白くも無い。

ヤ面白からぬ。文三には昨日お勢が「貴君もお出なさるか」ト尋ねた時、行かぬと答えたら、「へーそうですか」ト平気で澄まして落着払っていたのが面白からぬ。文三の心持では、成ろう事なら、行けと勧めて貰いたかった。それでも尚お強情を張って行かなければ、「貴君と御一所でなきやア私も罷しましよう」とか何とか言て貰いたかった……「シカシこりやア嫉妬じゃアない……」

と不図何か憶出して我と我に分疏を言て見たが、まだ何処かくすぐられるよう
で……不安心で。

行くも厭なり留まるも厭なりで、気がムシャクシャとして肝癪が起る。誰と云て取留めた相手は無いが腹が立つ。何か火急の要事が有るようでまた無いようで、無いようでまた有るようで、立てもいられず坐てもいられず、どうしてもこうしても落着かれな
い。

落着かれぬままに文三がチト読書でもしたら紛れようかと、書函の書物を手当放題に
取出して読みかけて見たが、いっかな争な紛れる事でない。小むずかしい面相をして書物と疾視競したところはまず宜たが、開卷第一章の一行目を反覆読過して見ても、更にその意義を解し得ない。その癖下坐舖でのお勢の笑声は意地悪くも善く聞えて、一回聞けば則ち耳の洞の主人と成って、暫らくは立去らぬ。舌鼓を打ちながら文三が腹立しそうに書物を擲却して、腹立しそうに机に靠着って、腹立しそうに頬杖を杖き、腹立しそうに何処ともなく凝視めて……フトまた起直って、蘇生ったような顔色をして、

「モシ罷めになつたら……」

ト取はず
とりはず
ト取外して言いかけて倏忽ハツと心付き、周章で口を鉗んで、吃驚して、狼狽して、遂に憤然となつて、「畜生」と言いざま拳を振挙げて我と我を威して見たが、悪戯な虫奴は心の底でまだ……やはり……

シカシ生憎故障も無かつたと見えて昇は一時頃に参つた。今日は故意と日本服で、茶の糸織の一寸小袖に黒七子の羽織、帯も何か乙なもので、相変らず立とした服飾。梯子段を踏轟かして上つて来て、挨拶をもせず突如まず大胡坐。我鼻を視るのかと怪しまれる程の下眼を遣つて文三の顔を視ながら、

「どうした、土左的宜しくという顔色だぜ」

「些し頭痛がするから」